

FD セミナーは大学の授業改善にどのように活かされたか 参加者に対するフィードバックの分析より

Discussing the Impact of Faculty Development Programs Offered by JSET

松田 岳士¹

根本 淳子²

鈴木 克明³

Takeshi MATSUDA

Junko NEMOTO

Katsuaki SUZUKI

¹島根大学

²愛媛大学

³熊本大学

Shimane University

Ehime University

Kumamoto University

<あらまし> 日本教育工学会は、毎年大学教員を対象としたワークショップ形式のFDセミナーを開催している。本研究は、1) FDセミナーが参加者の授業設計に与える影響と主催者側が期待する授業改善との間にどのような差があるかを検討し、2) FDセミナー自体の改善を考察するものである。そのために、セミナー参加者が提出した最終レポートに対する添削コメントをテキストマイニングした結果、評価方法に関する助言や学生からの視点を強調する指摘が多くみられた。今後のセミナーでは、受講者の分析や授業の出口設計に関する活動を増やすべきであることが示唆され、それに対応した実習部分をより充実させる改善が求められる。

<キーワード> ファカルティ・ディベロップメント、インストラクショナルデザイン、テキストマイニング、授業改善、成績評価

1. はじめに

日本教育工学会のFDセミナー（以下、セミナー）は、大学授業のデザインについてワークショップ形式で学ぶ研修会であり、2009年度にスタートし、改善を重ねながら、毎年実施されている（日本教育工学会 2014）。セミナーの詳細な内容や進行は毎年変更されてきたが、基本的には、インストラクショナルデザインの理論に基づいて受講者自らが担当する授業の改善案を作成するものである。また、セミナーの特徴の一つは、所定の内容を満たす最終レポートを提出した修了者に修了証を発行することであり、修了証を受ける目的で参加する受講者にとって、最終レポートがきわめて重要である。そこで、最終レポートの確認希望者には、講師による添削が行われている。図1に2013年度セミナーの概要（流れ）を記す。

本セミナーの最終レポートについては、2012年度の最終レポートを対象に、個々のレポートの主題に着目した分析結果の報告がなされている（根本・鈴木 2012）。本研究は、これをふまえて、セミナー講師側からのフィードバックに焦点を当てて、以下の2点を検討する。

1) FDセミナーが参加者の授業設計に与える影響と、主催者側が期待する授業改善との間の

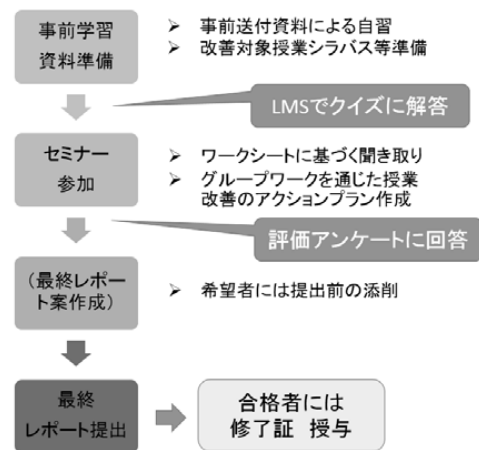


図1 FDセミナーの流れ

ギャップ

2) 1) から推察できる、FDセミナー自体の改善策

2. 対象・方法

本研究では、最終レポートを研究に使用することに対して承諾が取れた2012年・13年度のセミナーのレポートとそれに対する添削コメントを分析の対象とする。最終レポートを提出者は、12年度が17名、13年度が20名であった（表1）。

表1 セミナー参加者・提出レポート数

実施年度 (実施年月日)	参加者 数	レポート 提出者数(提出率)
2012 (2013.2.18)	29	17 (58.6%)
2013 (2014.3.3)	31	20 (64.5%)

分析には TRUSTIA/R.2 を用いて、次の順序で添削コメントの傾向を把握した。第一にコメントの中から共通する挨拶文や定型表現(「最終レポートを受け取りました」、「今後の授業の発展を楽しみにしています」など)を除外した。第二に、添削文の中で使用されている形容詞句から価値判断を表す語句、例えば「重要だ」、「必要だ」、「明確だ」などを、さらに動詞句から内容変更を示す「改善する」、「確認する」を抽出した。次に、これらの形容詞句や動詞句の主題となっている語句との間の係り受け関係をみていった。

3. 結果・考察

2012年度に事前添削したのは13名で、コメントの数は合計402文、受講者一人あたり30.9文である。2013年度は20名にコメントを記し、コメントは合計607文、同じく一人あたりでは30.4文で、年度による平均コメント数には差がみられなかった。

重要・必要・大事・明確という形容詞句の主題の多くは、2012年度は学習目標・ゴール・評価基準など授業の出口に関するものであった。また、2013年度は課題や評価に加えて、学習活動・シラバス・学生への指示の方法なども多かった。

改善・確認という動詞句の主題は、2012年度では課題・評価に関するものや授業の目標とその達成に関する内容が多く、達成度の測定方法やその考え方に関する指摘が中心となった。2013年度にはシラバスや教材が主題となることが多く、学生に対してどのように情報を示すかについての助言が中心であった。

これらの結果から、セミナー提供者側は、インストラクショナルデザインの基礎である「出口から設計する」という方法論を参加者自身の担当授業で活用できるようになることを求め、それが不十分であるレポートに対して、学習目標を見直すことやその達成度の測定方法の工夫を指摘・助言する形で強調していることが示唆される。また、特に2013年度は、学生に伝わるシラバスの書き

表2 語句使用頻度

年度	種別	語句(順位)	頻度
2010	形容詞句	重要だ(4)	13
		明確だ(5)	12
		必要だ(12)	6
2012	動詞句	確認する(5)	41
2013	形容詞句	必要だ(3)	20
		大事だ(4)	16
		明確だ(7)	13
	重要だ(9)	10	
3	動詞句	確認する(8)	49
		改善する(10)	37

方にも焦点が当てられ、その前提としての学習者分析に踏み込んだ指摘もみられた。

4. 今後の課題

セミナーには毎回定員を上回る受講希望者が申し込んでいる。加えて、終了後のアンケートでは東京以外での開催を求める声がある。したがって、今後実習やグループワークの充実と並び、規模の拡大(回数増加・地方開催)も必要である。

これらも勘案して改善案を考察すると、セミナー自体に関しては、出口の設計や学習者分析などの実習に時間を十分かけられるように、前提知識の学習にはeラーニングを取り入れて、事前に学んでもらうように設計しなおすといった変更が考えられる。また、内容のレベルを落とすことなく多くのセミナーを開くためには、ファシリテーターの育成も重要である。

謝辞

貴重な助言をいただいた日本教育工学会FDセミナー特別委員会の委員各位に感謝する。また、本研究の一部は科学研究費(基盤(B)課題番号24300289)の助成を受けている。

参考文献

- 日本教育工学会(2014) 大学教員のためのFD研修会の報告, ニュースレターJSET-199: 12
 根本淳子・鈴木克明(2012) FDワークショップ実践報告 デザイン力向上の支援を目指して, 日本教育工学会第28回全国大会発表論文集: 967-968.